

研究報告：秋田大学保健学専攻紀要20(1)：69 - 73, 2012

小学校3年生に対するソーシャルスキルトレーニング (SST) は 中学校生活に影響を与えるか？

上村 佐知子¹⁾⁵⁾ 佐藤 さゆ里²⁾⁵⁾ 浅沼 知一³⁾⁵⁾
曾山 和彦⁴⁾

要 旨

小学校中学年以降は「ギャング・エイジ」と呼ばれ、人間関係の基礎となる社会規範や社会的スキルを体得する時期であるが、近年は、社会情勢のためか、集団遊びができなくなり、児童の社会的規範や基本的なスキルを獲得する場が少なくなっているという報告が聞かれるようになった。我々は、この時期にソーシャルスキルを獲得することがその後の人生において重要だと考え、この時期にさしかかる小学校3年生の児童に対する SST を実施し、中学校での影響を検証した。

2003年の一学期に、A県O市内の2小学校3年生3クラス(合計112名)に対し、全6回のSSTを実施した。そして3年後に、この112名を含むS中学校1年生292名にアンケート調査を行い、SST実施者と未実施者のソーシャルスキルを比較した。

その結果、実施群は「学校生活意欲意欲尺度」の下位尺度である「学習意欲」において有意に好成績であった($p < 0.05$)。有意差は認められなかったが、思いやり行動の下位尺度である「かかわり」($p = 0.057$)、「基本的ソーシャルスキル」($p = 0.069$)において、実施群に良好な傾向が認められた。かかわりやソーシャルスキルが良好なことが円滑な人間関係を生み出し、学習意欲につながっている可能性がある。今後さらなる追跡調査によって、思春期危機を迎える中学校1年生後半以降においてSSTの効果を検証する必要がある。

はじめに

学校不適応である不登校の予防は小中学校におけるスクールカウンセラー(以下SC)事業の重要課題の一つである。我々SCは、不登校の問題を抱える小中学生の多くがすでに小学校中学年頃、集団遊びに行けず、人間関係につまずいたとする報告を多く聞く。また、いじめの加害・被害児童生徒や不登校児童生徒の中に、年齢相応のソーシャルスキルが獲得されていないケースが少なくない。小学校の中学年から高学年にかけて、子どもたちは発達心理学的に“ギャング・エイジ”と呼ばれる時期に入る。急速に仲間意識

が発達し、多くは同年齢の児童と閉鎖的な小集団(ギャング)をつくって、そこで遊びや活動をすることを喜びとするようになる。親や教師への依存関係から離れて、自立性や責任、役割意識、社会的ルールや人間関係などを培っていく²⁾。しかしながら、近年は、社会情勢のためか、集団遊びができなくなり、児童の社会的規範や基本的なスキルを獲得する場が少なくなっているという報告が聞かれるようになった¹⁻²⁾。河村³⁾は、ニート・フリーター問題は、単に現代の若者の青年期特有の問題ということだけでなく、その背景には青年期以前の解決できない発達の問題があるとし、その中にソーシャルスキルの学習不足があると述べている。

- 1) 秋田大学大学院医学系研究科保健学専攻
- 2) 横手市不登校適応指導「南かがやき教室」
- 3) 医療法人慧眞会ケイメンタルクリニック
- 4) 名城大学教職センター
- 5) 秋田県臨床心理士会スクールカウンセラー委員会

Key Words: ソーシャルスキルトレーニング (SST)
小学生
ギャングエイジ

曾山⁴⁾の小学校5, 6年生を対象にした調査によると, 児童のメンタルヘルスに大きくかわる因子として, 社会的スキルと自尊心が挙げられている。これらの2つが低下することは, 児童のメンタルヘルスを悪化させることとなる。自尊心は社会的スキルによっても向上する傾向を持つ⁴⁾ことから, 社会的スキルの引き上げは, 自尊心, ひいては児童のメンタルヘルスの向上に役立つものであるといえる。

このことから, 我々は, ギャング・エイジを目前にした小学校中学年児童に対するソーシャルスキルトレーニング(以下SST)を実施し, 社会的スキルの向上と学校不適応の予防に努めた。そして, 当該児童が中学1年生の際に追跡調査を行った。

本研究の目的は, 小学校3年生の児童を対象に, SC事業の一環としてソーシャルスキルトレーニングを実施したことが, 中学生になりどのように影響があるかを検証することである。

研究方法

平成15(2003)年にA県O市内のO中学校学区内のA, Bの2小学校3年生全3クラス(合計112名)を対象に, 一学期に全6回で1セッションのSSTを実施した。そして, 3年後のO中学校1年生292名に対し, アンケート調査を行い, SST実施者と未実施者を比較検討した。

1. SST 対象

A県O市内のO中学校学区内のA, Bの2小学校3年生全3クラス(合計112名)を対象とした。調査対

象と介入方法について図1に示す。

各クラスの特徴を以下に記載する。

A小学校3年松組(40名): 郊外にある1クラスのみ。担任がベテランである。穏やかで落ち着いたクラスの印象である。

B小学校3年松組(36名), 竹組(36名): 市街地にある。両クラスとも活気があるが, 落ち着いて授業が受けられないこともある。生徒指導や支援を要する児童が複数名存在する。

2. SSTの実施方法

平成15年一学期の特活時間に1セッション全6回SSTを実施した。SSTは, 構成的グループエンカウンターに熟練した専門トレーナー(A小学校松組, B小学校松組)とその指導下にある担任(B校竹組)が1セッション(各90分×6回)を担当した。構成的グループエンカウンターとは, 國分らが1970年代に我が国に紹介普及した技法であり⁵⁻⁶⁾, 人間関係にグループ技法を活用して体験させる方法で, 育てるカウンセリングとも呼ばれている。今回のSSTは構成的グループエンカウンターの手法を取り入れた以下の内容である。

第一回: オリエンテーション, あいさつ

第二回: 話し方と聴き方

第三回: 話し方と聴き方

第四回: 仲間に入れる・誘う・入る

第五回: 協力する活動

第六回: 協力する活動

授業は各テーマに基づいて, 「ウォーミングアップ」

「教示」 「モデリング」 「強化」 「ふりかえり」

の流れで行った。図2, 3に実際の場面を示す。

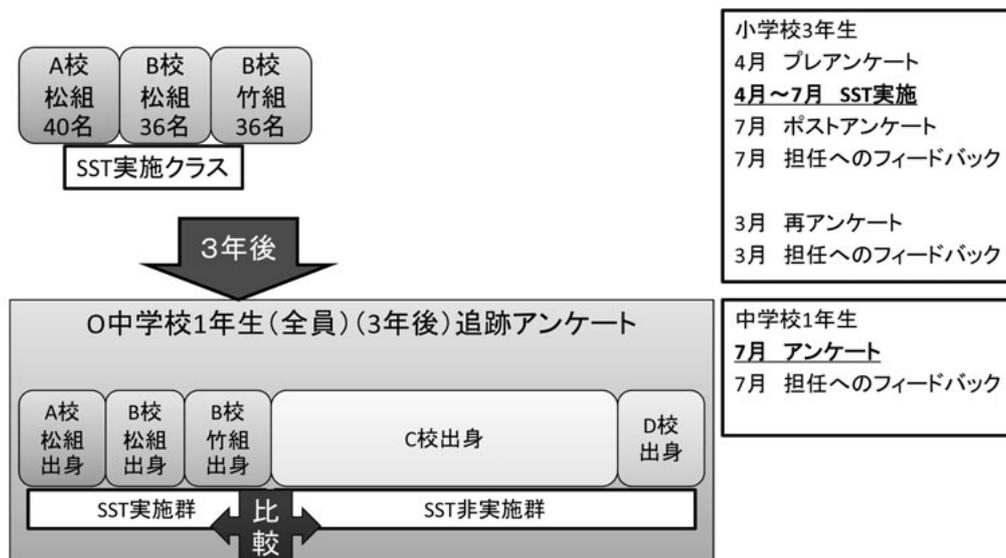


図1 調査対象と介入方法



図2 実際の場面：ウォーミングアップ（動物ジャンケン）



図3 実際の場面：教示「ふわふわことばとチクチクことば」

3. SSTの効果の評価方法

平成19年7月、SST実施者112名を含むO中学校1年生292名を対象に質問紙法によるアンケート調査を実施した。アンケートの記載は、担任が必ず一つ一つ読み上げ、これに生徒が答える自己記入方式を取った。また、アンケートの秘密は必ず守られ、個々の学校生活に役立てられることを十分に伝えた上で、生徒同士で見せ合わないことを注意した。アンケート内容は以下の通りである。

- (1) 基本ソーシャルスキル：小林⁷⁾らによるものを改変した12項目の質問紙であり、「いつもできると思う（4点）」から「まったくできないと思う（1点）」の4段階評価で、48点満点である。
- (2) Q U中学生用⁷⁾⁸⁾：Q Uは児童生徒の実態や学級集団の状態を把握するためのものであり、学校生活意欲尺度（やる気）9項目と学級満足度尺度（居心地）12項目の2つの下位尺度からなる。学級満足度尺度はさらに承認得点6項目と被侵害得点5項目の下位尺度を持ち、「学級生活満足群」「非承認群」「侵害行為認知群」「学級生活不満足群」の4つに分けられ、座標軸にプロットされる。すべて4段階評価で、各36点、44点が満点である。
- (3) Rosenbergの自尊感情尺度：「いつもそう思う（4点）」から「まったくそう思わない（1点）」の4段階評価で10項目から構成されている。逆転項目も含み、40点満点である。
- (4) 思いやり行動調査⁸⁾：河村らによる18項目の質

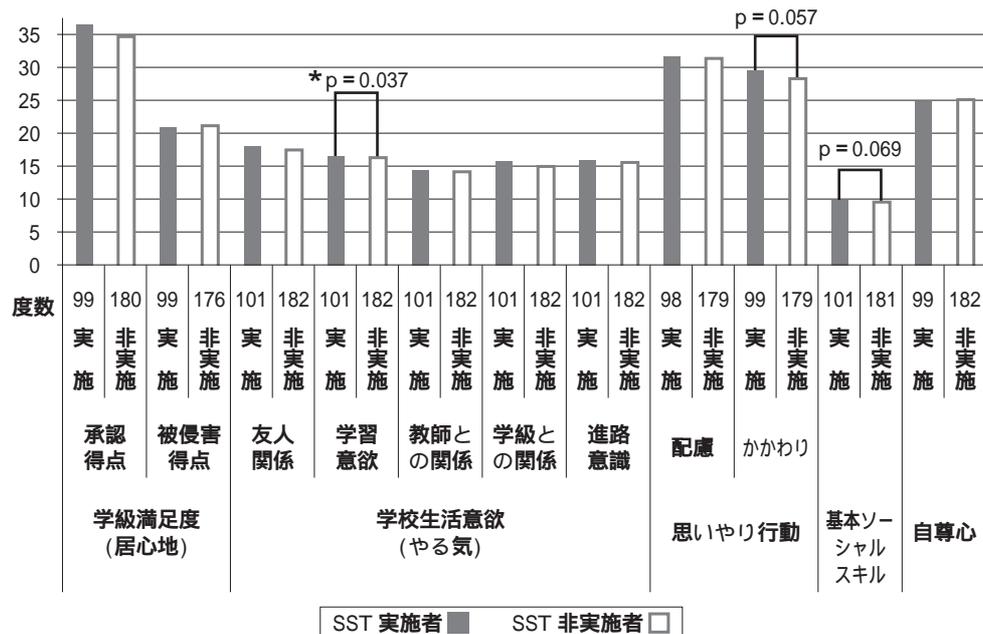


図4 中1の7月の追跡結果

問紙であり、「いつもできると思う(4点)」から「まったくできないと思う(1点)」の4段階評価で、72点満点である。「配慮」と「かかわり」の下位尺度からなる。

なお、アンケート、特にQ Uから得られた結果は、担任教師にフィードバックされ、その後の学級経営や個別指導への助言が与えられた。今回、小学校での結果やフィードバックについては割愛した。

4. 解析方法

統計解析はSPSS 12.0 for Windowsを用い、SST実施群と未実施群について対応のないt検定によって比較した。なお、危険率0.05未満をもって有意とした。

5. 倫理的配慮

本研究に先立ち、使用するアンケート調査が、生徒の生徒指導上の基礎資料や予防的介入に役立てていくためのものであることを文書で説明し保護者の同意を得た。また、個人情報に直接関わる教員の他は全く匿名化した。

結 果

SST実施群と未実施群を比較した結果を図4に示す。実施群は「学校生活意欲尺度」の下位尺度である「学習意欲」において有意に好成績であった($p = 0.037$)。有意差は認められなかったが、「思いやり行動」の下位尺度である「かかわり」($p = 0.057$)、「基本的ソーシャルスキル」($p = 0.069$)において、実施群に良好な傾向が認められた。その他のアンケート項目の平均点においてもSST実施群は未実施群よりも全体的に良好であった。

考 察

建設的な対人関係や集団生活・活動を通じて、子どもたちは人とかかわったり社会にコミットしていき知識と技術を身につける。そしてそれは、新たな人との付き合いや、社会環境に向かうときの大きな力となる。多くの人と仲良く交流し、自分らしく主体的に活動できている子どもは、人や社会とコミットする知識と技術に優れ、ソーシャルスキルが高いといえる³⁾。

今回調査した中学校1年生の7月という時期は、中学校入学により激変する新たな環境と人間関係の中で、慣れつつある時期である。つまり、個々のソーシャルスキルが明確に表れる時期であると考えられる。

今回用いたSSTの内容は、親和的で建設的にまとまった学級集団や、満足度が高く意欲的に学校・学級生活を送っている子どもたちが活用しているソーシャルスキルを集めた内容³⁾である。このようなSSTを熟練した専門トレーナーによって実践されたことは非常に得難い機会であった。SSTは、かつて、小学校高学年以降が好適とされてきたが、最近では小学校低学年にも応用されている³⁾。

本結果で、SST実施群が「学校生活意欲尺度」の下位尺度である「学習意欲」において有意に好成績であったことは、かつて学習したSSTが、基本ソーシャルスキルである配慮やかかわりのスキルであることから、SST実施群が、上手なかかわり行動を行っている可能性があると考えられる。そしてそのことが、円滑な人間関係を築き上げることができ、充実した結果として学習意欲も向上しているのではないかと考える。「思いやり行動」の下位尺度である「かかわり」、「基本的ソーシャルスキル」において良い傾向が認められたこと、その他のアンケート項目の平均点がSST実施群について良好であったことから、それぞれの関連が推察される。

つまり、ソーシャルスキルが良好なことが円滑な人間関係を生み出し、学習意欲につながっている可能性があり、中学校において、小学校時代のSSTの効果を示唆されたと考えられる。

中学校1年生の後半からは、思春期問題が多発し、不登校などの学校不適應のケースが急増する。今後さらなる追跡調査を実施し、SSTの効果を判断するとともに、思春期危機や学校不適應に備えた予防的介入を行っていきたい。

なお、本研究は、生徒のプライバシー保護や学校の連続性が経たれたことによる情報不足のため、SST実施者の同定にも困難があり、詳細な人数の把握が困難であった。また、生徒の詳細な学校適応についても入学から日が浅く、把握が困難であったことも、本研究の限界と言える。

文 献

- 1) 松岡努：交友関係。心理臨床学辞典 一般財団法人日本心理臨床学会編 pp172-173, 2011
- 2) 福岡子育てパーク：ギャング・エイジについて。
http://www.kosodate.pref.fukuoka.jp/lecture_b/archives/2005/10/post.html
- 3) 河村茂雄, 品田笑子, 藤村一夫編著：いま子どもたちに育てたい学級ソーシャルスキル 小学校高学年。

- pp10-16, 2007
- 4) 曾山和彦：児童のメンタルヘルスに影響を及ぼす要因の抽出．名城大学教職センター紀要第7号 2010.
<http://www.pat.hi-ho.ne.jp/soyama/kenkyu/kenkyu.html>
- 5) 長尾直子：構成的グループ・エンカウンターを取り入れた学習指導～つながりの中で個を育てる活動を通して～．第17回秋田県教育研究発表会口頭発表 2003
<http://www.pat.hi-ho.ne.jp/soyama/kenkyu/kenkyu.html>
- 6) 高橋一則：構成的グループ・エンカウンターを活用した学級づくり～アンケートQ Uを手がかりに～．第17回秋田県教育研究発表会口頭発表 2003
<http://www.pat.hi-ho.ne.jp/soyama/kenkyu/kenkyu.html>
- 7) 小林正幸・相川充：ソーシャルスキル教育で子どもが変わる小学校．図書文化社，p25-30，1999
- 8) 河村茂雄：学級診断尺度『楽しい学校生活を送るためのアンケートQ U』検査用紙・実施解釈ハンドブック．図書文化社，1999
- 9) 河村茂雄：グループ体験によるタイプ別！学級育成プログラム ソーシャルスキルとエンカウンターの統合中学校編．図書文化社，pp81-87，2001

Does Social Skill Training (SST) during the Third Grade of Elementary School Influence the Junior High School Experience?

Sachiko UEMURA¹⁾⁵⁾ Sayuri SATO²⁾⁵⁾ Tomokazu ASANUMA³⁾⁵⁾
 Kazuhiko SOYAMA⁴⁾

- 1) Akita University Graduate School of Health Sciences
- 2) Kei Mental Clinic
- 3) Yokote City Futoukoutekioudou "Minami Kagayaki" kyoushitsu
- 4) Center for Teacher Education, Meijo University
- 5) A committee on School Counselors, Akita Society of Certified Clinical Psychologists

Children learn social norms and social skills through group play experiences starting from about eight years old. We called the time "Gang age" and this experience is important in subsequent life. The purpose of this study is to investigate whether Social Skills Training (SST) with children of this age changes their behavior at the next educational level, in junior high school.

Subjects were 112 third-grade students from 2 elementary schools in O city, A prefecture. The subjects participated in six SST sessions in the spring of 2003. Three years later, the same subjects, as well as a control group of 181 students in the same grade at the same junior high school, were given a survey to assess social skills.

When the SST treatment group was compared with the control group, the treatment group showed positive results in "desire to learn" ($p=0.037$). Although there was no significant difference in the variables "personal connection" ($p=0.057$) and "fundamental social skills" ($p=0.069$), the treatment group had generally positive results. Overall, partial effect of SST was shown. These results will be further assessed by a follow-up survey.